

## Because I am a Girl

THE STATE OF THE WORLD'S GIRLS 2012

### Learning for Life

#### 世界ガールズ白書 2012 年版 サマリー 女の子が生き抜くための「学び」

##### 女の子が生き抜くための「学び」

「マラウイでは、特に農村部では、女の子はたくさんの困難に直面します。そして私は女の子だから、自分の権利のためにも、ほかの女の子たちの権利のためにも戦いたいです。

私たちも、尊重されるべき人間なのです」

マラウイの中学生、エリザベス（注1）

全ての女の子には、教育を受ける権利がある。しかし、世界中で 3,900 万人にもものぼる 11 歳から 15 歳の女の子が、学校に通っていない（注2）。「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」シリーズの第6弾にあたる 2012 年の白書は女の子の教育に焦点を当て、特に、思春期に達した女の子がどのような経験をするのかに焦点を当てている。この年頃になると、女の子の暮らしは教育を犠牲にして、家庭での役割や母親としての役割を中心としたものに移っていく。小学校レベルでの女の子の就学率は世界中で男の子に追いついている（注3）にも関わらず、女の子の小学校修了率は男の子に大きく後れを取っており、本白書のために行われた調査で判明したとおり、思春期に差しかかると、女の子たちは貧困や差別の圧力によって学校を去ることを余儀なくされる。家事を手伝うため、家族が教育に価値を見出していないため、学校で暴力を受けたため、妊娠や結婚のため、遠い学校に一人で通わせることで娘と自分たちの評判が悪くなることを親が懸念するために。

世界の各国政府には、女の子がジェンダー平等と社会的公正を手に入れる過程で直面する困難を認識することにより、この状況を変えるチャンスがある。質の高い9年間の教育を確約し、予算や教育計画の策定に思春期の女の子に特有のニーズを織り込むことができるのだ。

今年、国連事務総長が率いる教育に関する新たな世界的イニシアティブにおいて、難しい時期にあっても教育予算は確保するということが承認された。しかしこのイニシアティブでは、近年かなりの進歩が見られてはいるものの、「教育の質は世界の多くの地域で絶望的に低いまま」であるとも述べられている。新たなポストミレニアム開発目標のアジェンダは学校での学びの質を優先すべきであり、思春期の女の子たちのニーズが考慮されない限り、貧困の削減とジェンダー平等の実現のために策定され世界的に承認されているはずの目標の多くが、決して達成されないのだと理解すべきである。

「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2012」は、女の子が教育を受ける権利の保護・促進の要として、全ての女の子に質の高い 9 年間の教育を保証すること、そして、女の子や若い女性たちが自らのコミュニティにおいて重要な役割を担い、何世代にもわたる貧困の連鎖を断ち切ることができるようにすることを求めている。

「多くの人々にとって、女の子の教育は優先順位に入っていませんでした。ほとんどの親がひどい貧困から抜け出すために、娘をまだ幼いうちに結婚させていました。コミュニティで一番切実なニーズは、水、健康、そして食べ物だったのです」  
南スーダンの 14 歳、アイーシャ（注 4）

本白書は、多くの努力と善意にも関わらず、なぜ女の子がいまだに学校でも家庭でもチャンスを与えられずにいるのかを詳細に検証している。どうすれば、最も貧しく、最も世間から取り残されているような女の子も含めた全ての女の子を学校に通わせ続け、彼女たちが受ける教育の質を改善し、平等な市民として正当な地位を占められるよう力づけることができるのか？

特に思春期に達すると、女の子や若い女性たちはその潜在能力を発揮できるようにならない。生きていくための質の高い「学び」が、その中心にあるのだ。

### 単なる目標達成手段ではなく

「教育は権利であるが、あまりにも多くの女性と女の子にとって、それは現実とはなっていない。教育はメッセージを伝える。自信と希望のメッセージである。そのメッセージは子どもにこう伝えている。君には未来がある、君が考えることは重要なのだと」

国連事務総長による教育のための世界的イニシアティブ 2012

200 年以上にわたり、女の子の教育に関しては、人権と平等を土台とした多くの議論が交わされてきた。全ての女の子のためのより多くの、より良い教育の支援に関する議論を行うにあたっては、世界中の未来の社会人や母親を育成する場としての価値だけでなく、女の子たちをエンパワーするために教育が持つ固有の重要性が認識される必要がある。教育と

は、単に幅広い目標を達成するための手段としてだけでなく、人間の尊厳と密接に関わるものとして見なされるべきである。

### 権利のフレームワーク（注6）

女の子が教育を受ける際に必要となるものを分析するために、本報告書で使用された項目は以下の通り。

- ・教育を受ける権利：教育へのアクセスと参加
- ・教育における権利：ジェンダーに配慮した教育環境、プロセス、結果
- ・教育を通じての権利：より幅広い社会的公正につながるジェンダー平等の支援

「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」は、国際 NGO プランが世界の女の子の現状を評価し、年に一回発行する報告書である。女性と子どもが政策やその施行において配慮されている一方、女の子の具体的なニーズや権利は無視されることが多い。これらの白書は、女の子自身の声も含め、なぜ彼女たちに対して男の子や成人女性とは異なった対応をすべきかという裏づけを提供するものである。本白書には、2006年に開始され、9カ国142人の女の子たちの暮らしを定期的に調査した情報も含まれている。過去の白書には「女の子と紛争」、「女の子と世界経済」、都市や ICT における新たな機会に目を向けた「女の子と都市化・デジタル化の波」、そして2011年にはジェンダー平等における男の子と男性の役割を取り上げた「男の子の役割」などがある。これらの白書には行動のための提言が含まれ、政策決定者や計画立案者に対して、世界中の女の子の人生を変えるためにどんなことができるかを示している。プランは国際的支援団体であり、過去75年にわたって、世界50カ国で子どもとそのコミュニティとともに活動を行ってきた。

### 入学するだけでは不十分

「いつか、弟や妹たちがもう少し大きくなったら、私も学校に戻ることができるかもしれません。勉強して全部の科目で合格して、そうしたらもっといい仕事について、もっといい暮らしができるかもしれません。時々、先生か看護師になることを夢見たりします」  
タラント、14歳、ジンバブエ

現在、かつてないほど多くの若者が、思春期を学校で過ごしている。2009年の調査では、思春期の女の子が生涯で教育に費やす年数は平均6年であり、1990年の4年未満を上回った（注7）。人口増加、健康の増進、都市化の拡大といった世界的傾向の全てがこれに貢献しているが、この実績の主な要因は、世界中で教育へのアクセスに対する投資と意欲が大幅に増加したことである（注8）。

こうした実績が称賛されていることは間違いない。2015年に各国首脳が国連に集結し、ミレニアム開発目標の進捗について報告する際には必ず称賛されるだろう。しかし、これが事態の全体像を伝えているわけではない。

南アジア、サハラ以南のアフリカ、東アジアにおける女の子の就学率の増加は著しく、かつ男の子のそれよりも早い。しかし、増加傾向にあるのは都市部の裕福な女の子が大半なのだ（注9）。子どもの就学とジェンダー平等に関する世界目標を達成している国でさえ、最も貧しく、最も支援が届きにくく、あるいは最も差別されているコミュニティの女の子たちは、いまだに置き去りのままである（注10）。

就学率は、教育へのアクセスを測定する方法としては本質的に不完全である。その数値は年度のたった一日（時には学期初日という場合もある）に調べたものであり、子どもたちがその日に学校に来たということがわかるだけなのだ（注11）。就学率は、女の子たちが実際に定期的に学校に通っているのか、学校で実際に何かを学んでいるのかを正確に示す数値ではない。

2004年、全ての人々が基本教育を受けるために必要な金額は、アメリカとヨーロッパの人々がアイスクリームに費やす金額よりも少なく（310億米ドル）、化粧品に使う金額と大差はなかった（180億米ドル）（注12）。そして何より、2010年に世界中で武器に消費された1兆6千億米ドルの70分の1にしか過ぎない（注13）。

世界の多くの地域で、学校に通い続けられる機会が最も少ない女の子に共通する3つの要素が見られる。

- ・ 貧しいこと
- ・ 農村部に住んでいること
- ・ 差別されている、あるいは疎外されている民族に属していること。

世界中で最も貧しい20%に属する家庭のうち、学校に入学する就学年齢の子どもは全体の64%だが、世界中で最も裕福な20%に属する家庭では、90%が学校に入学する（注14）。この数字にジェンダー要素を追加すると、厳しい現状が浮かび上がる。最も貧しい家庭の女の子は、そもそも学校に行かせてもらえない可能性がきわめて高いのだ（注15）。

### 女の子の教育への障壁

アフリカ7カ国で最近行われた調査で、プランは思春期の女の子が学校に入学し、そして通い続けるにあたって直面する困難を検証した。その問題は複雑かつ膨大であった（注16）。

1 調査を行った全ての国において初等教育は名目上無償だが、どの家庭でも、子どもの教育に関しては初等教育レベルでさえ様々な費用がかかると述べている。その費用には学

用品、制服、通学費などが含まれる。ガーナでは、聞き取り調査を行った子どもの46%が、学校に行く際の最も大きな問題は教材や制服の不足だったと感じている。そしてさらに14%が、学費を払うことができないと述べている（注17）。

2 教員による生徒への虐待や性的暴力は、どの国においても蔓延している。プランが若年妊娠について聞き取りを行った際、トーゴでは聞き取り対象の子どものうち16%が、同級生を妊娠させた相手として教員の名を挙げたことが判明した。その数値はマリでは15%、セネガルでは11%であった。ガーナでは75%の子どもが、学校における暴力の主な加害者は教員だと述べた。セネガルでは、この数値が80%となる。

3 若年妊娠は日常的に見られ、中途退学の原因となり、女の子がたとえ出産後に復学したとしても、卒業できる可能性を限りなく制限してしまう。リベリアでは61%の子どもが、過去2年度の間妊娠した女の子を最低1人は知っていた。その女の子が出産後に復学したと答えた子どもはわずか5%であった。一部の国では、学費や教材費を捻出するために売春をすることが、たとえ否定的に見られようとも、一般的な慣習となっている。女の子が果たせる役割は妻や母としてのもののみであるという考えが、女の子の社会進出と教育目標に悪影響を与えている。ガーナでは83%の親が、「妊娠させられるかもしれないという懸念が娘を学校に通わせる上でのマイナス点」だと答えている。

4 家事に費やす時間の多さが、女の子の学習能力に悪影響を与えている。ギニアビサウでは、女の子が一日平均8時間を家事に費やしている一方、男の子たちは3時間しか費やしていないことがプランの調査で明らかになった。疲労と宿題をする時間の不足が、この労働の結果として挙げられている。

5 高い貧困レベルは男の子と女の子両方の栄養状態に影響を及ぼすが、この問題を解消する学校給食プログラムは数少ない。マリでは、NGOや政府の支援がなくなったために学校食堂の閉鎖が余儀なくされたが、不作だったために家から食べ物を持つてくることもできなかったと言う子どもたちがいた。これにより、出席率が大きく影響された。

貧しい両親が、長期的投資である教育から最も見返りを得られそうなのはどの子かという判断を下す際、女の子は子守としてすぐに役立ち、花嫁としての価値を持ち、家事やその他の労働で家庭に貢献することができるため、教育によって将来得るかもしれないという不確実で保証もない利益と比較すると、女の子はその労働力のほうが貴重だとみなされる場合がある（注18）。

政府や寄付者からの資源が限られている以上、資源を最も必要なところ、すなわち最貧層の、社会から取り残されたコミュニティへ集中させるのは当然のことである。条件付きの送金や奨学金だけでは女の子、特に最貧層の女の子の最も重要なニーズに応えるには不十分だ。学校の質を高めるための補完的な支援がなければならない。これは、最貧層の女の子は最貧層の学校に通っており、子どもの学習を支えて強化する時間や学力のない家庭で育てているからである。そこで、学校を拠点としたアプローチによって、発展から取り残された学校を特定して支援すると同時に、限られた補完的な資源を、最も困窮している女の子たちに提供することが考えられる。これを継続して成果をあげるまでには、時間が必要である。まさに、次世代の女の子たちが教育を受け、力を与えられ、コミュニティの中で影響力とリーダーシップを持つ地位に就くまでの時間が必要なのだ。

シンシア・ロイド

### 「学び」とは何か？

「数学の先生につきあってほしいと言われましたが、私にはそれができませんでした。それが問題になりました。私がどんな小さな間違いや悪いことをしても、毎回のように罰を受けました。それが、私が学校を嫌いになってやめてしまった理由のひとつです」

シエラレオネの女の子、19歳

「学び」とは単なる計算能力、読解力、あるいは生活技能のことではない。女の子が自分について学ぶこと、すなわち女の子として、さらには自分が暮らすコミュニティや社会の一員として学ぶことも重要なのである。学校が男の子・女の子を問わず全ての生徒たちに教える価値は、公式なカリキュラムと同様に重要なものである。

女の子が、自分たちが男の子たちほど賢くはないと教えられてしまうのか？ 女の子は数学や科学を勉強するものではないと言われているのか？ 教科書の絵が全てそうになっているから、あるいは教員が教室の掃除を頼んだりお茶を持ってくるよう頼むのがいつも女の子だからという理由で、女性は男性に従属するものだと思込まれてしまうのか？ それとも、女の子は意思決定や選択をする方法を学び、世界を理解することを学び、学校を卒業したら自分たちが価値を見いだせるような人生を生きる力が持てるのだと思うようになるのか？

社会の全ての苦難を教育だけで解決することはできないが、質の高い教育は女の子たちに自分のキャリアパスを選ぶために必要な技術と能力を与え、パートナーや家族、友人と健全で前向きな関係を築けるようにし、自分の身体と健康について前向きな決断を下せるようにする。

つまり、あなたが学び、あなたが学校で経験しているような質の高い教育が、成人に達してからの様々なチャンスへの道を開く鍵となるのだ。

「男の子たちは十分自信を持っていて、授業中に質問ができるのだと思います。そうすると、先生は男の子たちが課題を理解していて、頭がいいのだと思います。私たち女の子も質問をしたいのですが、恥ずかしいからできません。そうすると授業をただ聞くだけになってしまいます」

パキスタンの女の子（注 20）

女の子は入学するだけ、あるいは定期的に通学するだけでは学ぶことができない。思春期の女の子は、教育の場で様々な障壁や困難に直面し続ける。ジェンダーの平等を「学び」の中核に据えることで、そうした困難のひとつひとつをチャンスに変えることができる。教員の研修においては、教員が自らの理解を反映しつつ、不平等を招くような差別や信条に対処できるような形でジェンダーを組み入れる必要がある。教育者は教員の数や設備・経費の額だけに目を向けるのではなく、その設備や経費が誰によってどのように使われているのか、そして教員が誰に対してどのように教育を行っているのかに目を向けるべきである。こうした問題を思春期の女の子の観点から見ることで、教育制度は女の子を「学び」から遠ざけている障壁を取り除くことができる。

### 生き抜くための「学び」が、なぜ思春期の女の子にとってそれほど重要なのか

思春期の女の子は、成人期への入り口に立っている。思春期の女の子が学校に通い続けて本物の学びを身につければ、彼女たちは将来より多くの収入を得、結婚はより遅くなり、産む子どもの数は少ないがより健康な子どもを産めるということが調査によってわかっている。長期的には、中等教育は女の子たちを HIV とエイズ、セクシャルハラスメント、人身売買から守るのである。つまり、中等教育は資金と生活技能と組み合わせることによって、思春期の女の子たちのエンパワーメント、成長、保護には欠かせないものとなる。

教育の重要な成果は、より広範囲な社会正義に関わるものでなければならない。教育なくして、平等という目標は達成できない。しかし教育だけでは不十分である。中南米及び中東では、近年見られるようになった女性の教育水準の向上を受けても、職場や家庭におけるジェンダー平等が比例して改善されるという状態にはなっていない（注 21）。女の子や若い女性はいまだに、自分たちが二流市民だという意識を抱えながら大人になる。彼女たちが社会で平等な役割を担うのであれば、彼女たちが修了する教育は真に力を与えるものであり、彼女たちが避ける術もなく直面する差別に立ち向かえるような能力と決意を身につけさせるものでなければならないのだ。

## 主導権を握る女の子たち

女の子のための教育は単なる権利の話ではない。人生における要点である健康、人間関係、仕事、市民権において、女の子がその権利を活用して何ができるかという問題でもある。例えば、質の高い教育は、女の子が自分の健康と出産について自ら判断や選択を行えるようにするべきである（注 22）。

- ・思春期に学校に通い続けた女の子の結婚時期は、そうでない女の子よりも遅くなる
- ・思春期に学校に通い続けた女の子は、婚前性交を経験する割合は低く、避妊具を使用する割合は高くなる
- ・初等教育を修了するだけでも結婚や初産の年齢は上がり、生涯出生児数は減るといふ、大きな影響が出る（注 23、24）。
- ・調査によれば、女性が教育を受ける期間が4年増えるごとに出産数は1人下がるが、学校に通った年数が7年未満の女の子は、18歳までに結婚する確率が高くなる（注 25）。
- ・1987年から1999年にかけて8カ国で行われた調査によると、女の子が中等レベル以上の教育を受けているかどうか、まだ思春期のうちに初産を経験するかどうかを決定づける、最も確実な要素である（注 26）。

## 教育の保護的役割（注 27）

学校の中や周辺で女の子に対して行われる暴力に対しては、それらを明るみに出すための様々な取り組みがなされてきた。女の子は通学の途中で、学校内で、ジェンダーに基づく暴力の被害を受ける場合がある（注 28）。しかし、こうした暴力への取り組みに注力するあまり、教育が本来もつ価値が見失われてしまうこともありえる。教育は、暴力につながるジェンダー間の不平等な基準と力関係に意義を唱えられるような自信と洞察力、そしてネットワークを女の子たちに提供し得るはずなのである。

中等以上のレベルまで教育を受けた女性は教育を受けていない、あるいは初等教育止まりの女性と比べて暴力を受ける可能性が低だけでなく、中等以上のレベルまで教育を受けた男性も、教育を受けていない、あるいは初等教育止まりの男性よりも暴力を振るう可能性が低いのだ。

- ・調査を実施した14カ国中11カ国で、中等以上のレベルまで教育を受けた女性は暴力を受ける可能性が低かった
  - ・14カ国中9カ国で、高等教育を受けた夫は身体的あるいは性的暴力を振るう割合が低かった。男性が学校教育を受けた期間が長いと、妻に対する身体的・性的暴力をある程度抑えることができると思われる
  - ・ほとんどの国において、初等レベル以上まで学校教育を継続することで、男性が暴力を振るうリスクが減少した
- 教育は人の態度を変化させると思われる。女性が暴力を訴え出て、あるいは協力し合っ



ジェンダーに基づく暴力に立ち向かったり進歩的な法律を求めて活動したりするようになるにつれ、暴力の連鎖を断ち切ることも可能になる。ナイジェリアでは、教育を受けていない女性の 71%が、夫に黙って外出した妻は夫から暴力を受けてもしかたないと考えている一方、中等以上の教育を受けた女性で同じ意見を持つのは 33%に過ぎなかった。ケニアでは、教育を受けていない女性の 61%が夫に口答えする妻は夫から暴力を受けてもしかたないと考えている一方、同じ意見をもつのは、初等教育を受けた女性では 52%、中等以上の教育を受けた女性では 27%だった。

(詳しいデータについては、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2012」報告書本文を参照のこと)

### 平等という真の約束

現在、地球上で女性が男性とまったく同等である場所は存在しない。世界経済フォーラムで、エンパワーメントの4つの区分が確認された。「経済活動への参加と機会」、「教育を受ける機会」、「健康と生存」、そして「政治的エンパワーメント」の平等である。しかし、女性の実績が男性のそれと同等あるいは上回る国はただのひとつもない(注 29)。すなわち、女の子と女性が男の子と男性と同様の扱いと機会をいつどこで求めても、彼女たちはいまだに抑え込まれ、支払われる額も少なく、声を聞き入れられないのだ。

差別は女の子や女性の生活に、幼少期から成人期にわたって影響を与え続ける。例えばそれは乳幼児や小児期の死亡率を上げ、教育の普及を妨げ、そして子どもたちをあらゆる危険から守ることができない現状を生み出す。また、一家の経済状況を不安定にし、家庭および地域における意志決定への子どもや若者の参加を阻む。

こうした数々の「子どもの権利」の侵害の多くが、ジェンダーに基づく不公平、排除、不公正に起因している。本報告書では、全市民を尊重する社会を構築する上で、教育が保護的かつ変革的役割を果たすべきだと述べている。思春期の女の子の経験と彼女たちが質の高い教育を受けるにあたって直面する障壁に焦点を当てることによって、プランは個人の権利を擁護するだけでなく、女の子たちがコミュニティにおける積極的かつ創造的な一員となる権利も擁護しているのである。我々が調査の過程で出会った女の子たちは自分たちの能力、熱意、決意を示してくれた。彼女たちは教育の価値を知っており、本報告書に登場するタラントやグロリア、アイーシャ、エリザベスの声に耳を傾けることで、彼女たちが選択の自由のために戦っていることが見て取れる。このような女の子たちを支えることで、我々はさらに幅広いもの——平等という真の約束を支援しているのだ。

### 整備士グロリア

「たまに、作業着を着たまま家に帰ると、みんなが私を見て笑います。『女が作業着なんか

着るもんじゃない！ それは女の仕事じゃない！ 男の仕事だぞ！』と叫ぶのです。私が一家の恥だと思っているのです。でも、私は自分が正しいことをしているとわかっているから、気を強く保っています。私は幸せだし、誇らしく感じています。男の人ができることは、女の人にだってできるのです。

私は、ジュバ工業高等学校で初めて学んだ女生徒の1人です。南スーダン中探しても、男性の整備士ばかりです。女性は1人もいません。でも私は、その役割を自分が引き受けたのはいいことだと思います。

車のことはなんでも勉強しています。これまでもたくさんのことを勉強しました。エンジンやギア、ラジエーターの分解の仕方。車が故障したら、どうやれば直せるかわかります。

南スーダンでは、人脈がないと、どれだけがんばっても仕事は見つかりません。でも物の作り方を知っていて、大工や自動車の整備士ができれば、物事はずっと簡単です。ちゃんと仕事が見つかります。だから私はこの専門学校に入ろうと決めたのです。

この国では結婚すると、夫は妻が働くことを許してくれません。読み書きができて、学校教育を全て修了しても、働くことを許してくれないのです。将来、私は自動車整備士として大成功したいと思っています。私はいいお手本だと思います。時々、偉い人たちが私を勇気づけて、私はいい前例だと言ってくれます。あの人たちも、女がこんなことをできるなんて信じられないから、私を見て喜ぶのです！」

グロリア・ジョイ、18歳。南スーダンでプランが支援するジュバ工業高等学校で学ぶ自動車整備士研修生。

### 「Real Choices, Real Lives」～本当の選択、本当の人生～ 進捗報告

6年目に入った「Real Choices, Real Lives」～本当の選択、本当の人生～の調査は、世界9カ国（ベナン、ブラジル、カンボジア、ドミニカ共和国、エルサルバドル、フィリピン、トーゴ、ウガンダ、ベトナム）に暮らす142人の女の子を追跡している。この調査は、女の子たちの親族やその周りに暮らす人々に対する詳細な聞き取りとフォーカスグループによる話し合いを通じて、彼女たちの暮らしをより深く理解しようと努めるものである。調査に参加している女の子の大半が、今は幼稚園か小学校に通っている。

少数がまだ学校に入っていないが、その理由として親は学校までの距離と娘の体の弱さを挙げている。

一般的に、親は娘の学校での進歩に対する誇りを表している。同時に、娘が受ける教育の質について、次第にはっきりと意見を述べるようになってきている。数名の親が、自分たちに学費が払えて、娘が1人でも安全に通学できるのであれば、家から遠くてももっといい学校へ行かせたい、と繰り返し主張している。

調査に参加している家庭の多くが、過去1年間に生活費が上がったと報告しており、医療

費が増えたという家庭も多い。大半の場合、一家の収入の大部分は食費に充てられている。しかし多くの場合、子育てをするにあたっては、子どもを学校に行かせる費用の一部も負担しなければならないということになる。

### 私たちは今、6歳

今年、プランによる上記の調査に参加している女の子たちは6歳になる。人生において、かなり大きな節目である。多くが今は学校に通っているため、家庭の外での経験が彼女たちの人生により大きな影響を与え始める年でもある。彼女たちは多様な人々に出会うこととなり、母親が最も影響を与える手本であることには変わりはないが、教員や友人、年長の子どもたちも、彼女たちにとってはますます重要な存在となっていくことであろう。家庭では、女の子と一緒に過ごすのは一家の女性たちとであり、6歳にして既に遊びながら女性が担う家事のまねごとをしたり、明確にジェンダーによって区別された家事を手伝わされている。カンボジアのチアは教員になりたいと思っているが、こうも言っている。「皿洗いや、おかあさんが薪を集めるのを手伝うのも好きです」

### 人生の物語

今年の白書においては、女の子たちの母親への詳細な聞き取り調査が実施された。母親たち自身の子ども時代から始まり、人生における転換点、思春期に下した大きな決断、そして現在の母親となるに至るまでの彼女たちの人生を掘り下げたのだ。去年は、女の子たちの父親 100 人近くに話を聞いた。この2つの聞き取り調査の違いは、特に思春期の経験に関しては、かなり対照的なものであった。思春期は、人生におけるチャンスが男の子にとっては大きく開け、女の子にとっては閉ざされてしまう時期なのである。

女の子たちの母親の多くが、人生は諦めざるを得なかった志と打ち砕かれた夢の繰り返しだったと話している。多くが、思春期に家事手伝いを始めたと言う。そしてこれが正規の学校教育に悪影響を与えただけでなく、多くは虐待や不当な扱いを、時には親族からも受けていたと述べた。彼女たちの人生を通じて、我々は思春期がいかに重要な時期だったかを認識することができる。この時期に、彼女たちは家庭における仕事を増やされ、結果的にはそのために学習の展望が断たれてしまったのである。数名が14歳前後で結婚しており、この時点で彼女たちの正規の教育は終わった。妊娠した女の子たちにとって、学校環境は厳しい場所となり、妊娠もまた、彼女たちの学歴を実質的に断ち切ってしまうのである。

### 変わりゆく時代

女性が家事労働の担い手として決められている一方（こうした男女間の役割分担が広く行われていることは明らかである）、徐々に増えてきているように思われるのは就学年齢の女の子には宿題や遊び、休憩の時間をもっと必要だという認識である。ドミニカ共和国に住む女の子、ノエリアの祖母メルセデスはこう語る。「孫娘には私が彼女にどう育ってもらい

たかったか、覚えていてもらいたいのです。学んで、勉強してほしいがっていたこと。今日は洗濯をしなきゃいけないから、皿洗いをしなきゃいけないから、何かしなきゃいけないから学校へ行ってはいけないなどと私が一度も言わなかったということ。いいえ、私は孫娘が勉強できるよう、そっとしておいてあげたのです」

女の子たちの母親は大半が 20 代から 30 代の年齢層で、彼女たち自身、急激な社会変化の中で育ってきた。全体的に見ると、女性たちは今、変化の時代に生きており、女性と女の子には今や以前よりも幅広い機会があることを認識している。

全体を通して何よりも印象的なのは、女の子の教育に対する女性たちの考えが圧倒的に前向きなものになっていることである。聞き取りを行った女性のほぼ全員が、「娘の将来に何を望みますか？」という質問に対し、自分よりも良い教育を受けてほしいと答えている。娘により良い未来を与えられるよう、現状を少しずつ打破していると答えた母親もいた。ウガンダに住むジュリエットの母親ローズはこう説明する。「私は、いつも子どもたちの将来のことを考えています。娘たちには常に、学校へ行くよう勧めています。息子たちにはヤギやニワトリを買い与えましたが、娘たちには土地を買い与えました。息子たちは、父親の持つ土地をいつでももらえるからです」。

ドミニカ共和国のキャロリン（6 歳）は、母親世代の希望を確実に感じ取っている。大人になったら何がしたいか、と聞かれ、彼女は自信たっぷりにこう答えた。「大学に行きたい」。調査対象となった娘を持つ家庭のほぼ全てにおいて、繰り返し聞かれる「時代は変わりつつある」というフレーズが希望の根拠となっている。とりわけ母親は娘に自分とは違う、自分よりもいい人生を送ってほしいと願っており、教育がそのための道筋だと考えている。貧困と男女間の役割分担という凝り固まった考えが組み合わさった障壁を乗り越えるのに、彼女たちのコミットメントだけで十分だろうか？ この 6 歳の女の子たちは自分の権利、特に教育を受ける権利が尊重されるような家庭と社会において、潜在能力を存分に発揮できるようになるのだろうか？ 女の子たちの人生における最初の 10 年を追う中で、貧困と差別が人々の善意を損なう現状に我々の希望は試されていると言える。

## 行動への呼びかけ

- 1 ポストミレニアム開発目標の全てのフレームワークが、教育を最優先事項とし続けるようにすること。加えて、ジェンダー平等に計画的重点を置き、最低 9 年間の質の高い教育を成功裏に修了させるところまで目標を広げること
- 2 政府の教育部門の政策にジェンダーの観点からの見直しを実施し、特定された格差に取り組む活動を支援すること
- 3 女の子に対する質の高い教育を支援するために、資金獲得の仕組みを拡大すること

ミレニアム開発目標のカテゴリー 3 は、その国際的政策の中心にジェンダー平等を据えて

いる。それは社会のあらゆる階層で取り組まなければならない野心的な目標であり、今我々が住むこの世界で、広範囲に及ぶ変化を必要とするものである。真のジェンダー平等を確認するため、家庭やコミュニティにおける女の子と女性の地位を測定するにはどうすれば良いだろう？ ジェンダーに基づく暴力はどうすれば軽減でき、家庭や職場における意思決定の平等はどうすれば図れるだろう？ 女性が男性と同等に賃金を受け取り、女の子が社会において平等な役割を担えるようにするには、どうすれば良いだろう？ 女の子と男の子、両方の教育が鍵となる。

学校における機会の平等、質の高い教育の提供、そして女の子が確実にその教育を受けられるようにすることが肝要である。教育だけでは我々が生きるこの社会を変革させるには不十分かもしれないが、教育抜きに変革を実現することは決してできない。教育がいかに女の子の自立に貢献できるかに注目することで、教育関係者や政府、そして女の子自身が、より自由に、より充実した人生を生き、周りの世界を変えていけるよう女の子たちを本当の意味で支援する教育を形作っていくことができるようになるのである。

「家族の中で大学に行ったのは私だけです。私は家族でもコミュニティでもお手本であり、村の女の子たちにはいつも、貧しさに夢を砕かれそうになってもベストを尽くしてがんばるようにと励ましの言葉をかけています」

フィレヒウオット・イエマネ、24歳、エチオピア（注30）

気候変動から政治的・経済的不安定、貧困に至るまで、現在我々が直面する深刻な問題を変革するための永続的な解決は、世界中の女性と女の子の全面的な参加なくしてはありえない。これはつまり、世界の女の子の現状に心から注意を向けるということである。裏づけを並べ、行動を呼びかけるプランの一連の白書及び「Because I am a Girl」グローバルキャンペーンは、我々個人の責任、そして共同責任として、ジェンダー平等を推進させる手助けをしてくれる。

ミシェル・バシュレ

国連女性機関事務局長、「Because I am a Girl 世界ガールズ白書 2012」序文

（脚注）

1 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl: Elizabeth in her own words (Because I am a Girl: 自分の言葉で語るエリザベス)」、2012年3月、<http://bcimagirl.tumblr.com/>（最終アクセス日 2012年4月12日）

2 UNESCO、「Education For All Global Monitoring Report: The Hidden Crisis: Armed Conflict and Education. (万人のための教育グローバルモニタリングレポート——隠れた危機——武力衝突と教育)」、パリ、UNESCO、2011年。

- 3 国連、「ミレニアム開発目標 2012」、ニューヨーク、国連、2012 年  
(p3 脚注)
- 4 ブラン・南スーダン事務所、「2012 年 12 月ニュースレター」、内部文書、2012 年。
- 5 Unterhalter, E.、「Gender, schooling and global social justice (ジェンダー、学校教育、グローバルな社会的公正)」、ロンドン、テイラー・フランシス・ルートレッジ、2007 年。
- 6 Subrahmanian, Ramya、「Gender equality in education: Definitions and measurements. (教育におけるジェンダーの平等——定義及び測定)」、『International Journal of Educational Development (教育開発国際ジャーナル)』25 号 (2005 年)、  
[http://pearsonfoundation-irc.org/genderandeducation/PDF/1.2\\_Gender\\_equality\\_educat.pdf](http://pearsonfoundation-irc.org/genderandeducation/PDF/1.2_Gender_equality_educat.pdf) (最終アクセス日 2012 年 5 月 25 日)
- 7 Lloyd, Cynthia B. (編)、「Growing Up Global: The Changing Transitions to Adulthood in Developing Countries (グローバルに成長する——開発途上国における変革)」、ワシントン D.C.、ナショナル・アカデミーズ・プレス、2005 年。
- 8 Lloyd, Cynthia B. (編)、「Growing Up Global: The Changing Transitions to Adulthood in Developing Countries (グローバルに成長する——開発途上国における変革)」、ワシントン D.C.、ナショナル・アカデミーズ・プレス、2005 年。
- 9 UNESCO、「Education For All Global Monitoring Report: The Hidden Crisis: Armed Conflict and Education. (万人のための教育グローバルモニタリングレポート——隠れた危機——武力衝突と教育)」、パリ、UNESCO、2011 年。
- 10 Levine, Ruth, Cynthia Lloyd, Margaret Greene, Caren Grown、「Girls Count: A Global Investment and Action Agenda. (女の子は重要である——世界的投資及び行動のアジェンダ)」、ワシントン D.C.、世界開発センター、2008 年。
- 11 Banjee, Abhijit V., Esther Duflo、「Why Aren't Children Learning? (なぜ子どもたちは学んでいないのか?)」、『デベロップメント・アウトリーチ』、2011 年。
- 12 Halweil, Brian, Lisa Mastny, Erik Assadourian, Christopher Flavin, Hilary French, Gary Gardner, Danielle Nierenberg, Sandra Postel, Michael Renner, Radhika Sarin, Janet Sawin, Amy Vickers、「A Worldwatch Institute Report on Progress Toward a Sustainable Society. (地球白書 2004: 持続可能な社会に向けたワールドウォッチ研究所の進捗報告)」、ワシントン D.C.、ワールドウォッチ研究所、2004 年。
- 13 ストックホルム国際平和研究所、「Background paper on SIPRI military expenditure data, 2010.」(SIPRI 軍事支出統計に関する背景報告書、2010 年)、引用元: ストックホルム国際平和研究所、「SIPRI Yearbook 2011: Armaments, Disarmament and International Security. (SIPRI 年鑑 2011: 兵器、軍事縮小及び国際安全保障)」、オックスフォード大学出版局、2011 年 7 月。
- 14 UNICEF、「子どもたちのための前進 公平性のあるミレニアム開発目標 (MDGs) の達成をめざして」、ニューヨーク、UNICEF、2010 年。
- 15 Lake, Anthony、「UNGEI Global Conference on Girls: Opening Ceremony Remarks Speech. (UNGEI

女の子のための世界会議——開会式のスピーチ)」、セネガル、ダカール、UNICEF、2010年5月17日。  
[http://www.unicef.org/media/media\\_53665.html](http://www.unicef.org/media/media_53665.html) (最終アクセス日2012年5月23日)

16 Lucas, Natalie, 「Girls' retention and performance in primary and secondary education. Makers and breakers: A research project to investigate the dynamic of factors influencing school retention and performance of girls in Africa (初等及び中等教育における女の子の通学継続と成績。作者と壊す者——アフリカの女の子たちの通学継続と成績に影響する要素の原動力を調査する研究プロジェクト)」、プラン、2012年(未発行)

17 Lucas, Natalie, 「Girls' retention and performance in primary and secondary education. Makers and breakers: A research project to investigate the dynamic of factors influencing school retention and performance of girls in Africa (初等及び中等教育における女お子の通学継続と成績。作者と壊す者——アフリカの女の子たちの通学継続と成績に影響する要素の原動力を調査する研究プロジェクト)」、プラン、2012年(未発行)。

18 プラン・インターナショナル、「Because I am a Girl: The State of the World's Girls 2009, Girls in the Global Economy: Adding it all Up (Because I am a Girl——世界ガールズ白書2009、女の子と世界経済)」、プラン・インターナショナル、2009年。

19 Mukhopadhyay, M., N. Mudege, L. Wolmarans, C. Hunter, 「DFID PPA funded "Building Skills for Life for Adolescent girls"' Programme: Global Baseline report prepared for Plan UK by KIT. Final Report. (DFID PPAの資金援助による「思春期の女の子のために人生に必要な技術を構築する」プログラム——プラン・UKの依頼によりKITが作成した世界のベースライン報告)」、アムステルダム、KIT、2012年。

20 Page, Elspeth, Jyotsna Jha (編)、「Exploring the Bias: Gender Stereotyping in Secondary Schools. (先入観に関する調査——中学校におけるジェンダーに基づく固定観念)」、ロンドン、コモンウェルス事務局、2009年。

21 Lanza Meneses, Martha, プラン「Because I am a Girl 世界ガールズ白書2012」報告書に寄せて。Roudi, Farzaneh, Valentine M. Moghadam, 「Empowering Women, Developing Society: Female Education in the Middle East and North Africa. (女性にエンパワーメントを、社会に発展を——中東及び北アフリカにおける女性の教育)」、ワシントンD.C.、人工資料局、2003年。

22 Malhotra, Anju, Rohini Pande, Caren Grown, 「Impacts of Investments in Female Education on Gender Equality. (女性の教育への投資がジェンダーの平等に与える影響)」、ワシントンD.C.、ICRW、2003年。

Herz, Barbara, Gene B. Sperling, 「What Works in Girls' Education: Evidence and Policies from the Developing World. (女の子の教育に何が効くか——開発途上世界における証拠と政策)」、ニューヨーク、外交問題評議会出版、2004年。Rihani, May A, Lisa Kays, Stephanie Psaki, 「Keeping the Promise: Five Benefits of Girls' Secondary Education. (約束を守る——女の子の中等教育における5つの利点)」、ワシントンD.C.、教育開発アカデミー(AED)、2006年。

23 DFID, 「Choices for women: planned pregnancies, safe births and healthy newborns: The UK's Framework for Results for improving reproductive, maternal and newborn health in the developing

world. (女性の選択肢——計画的妊娠、安全な出産、健康な新生児——発展途上世界における性と生殖、妊産婦と新生児の健康改善を目指す英国のフレームワーク)」、ロンドン、DFID、2010年。

24 Temin, Miriam, Ruth Levine, Nandini Oomman, 「Why it's the right time: Moving on Reproductive Health Goals by Focusing on Adolescent Girls. (なぜ今がその時なのか——思春期の女の子に焦点を当てることで性と生殖の健康における目標を押し進める)」、ワシントンD.C.、ウィメン・デリバー、2010年。引用：Ainsworth, Martha, Innocent Semali, 「Who is Most Likely to Die of AIDS? Socioeconomic Correlates of Adult Deaths in Kagera Region, Tanzania. (エイズで死ぬ可能性が最も高いのは？ タンザニア、カゲラ地域における成人死の社会経済的相互関連)」、Ainsworth, M., L. Fransen, M. Over (編), 「Confronting AIDS: Evidence from the Developing World. (エイズに立ち向かう——発展途上世界からの証明)」、ブリュッセル、欧州委員会、1998年にて。Jejeebhoy, S. J., 「Women's Education, Autonomy, and Reproductive Behaviour: Experience from Developing Countries. (女性の教育、自治、性と生殖の行動学——開発途上国の経験)」、オックスフォード、クラレンドン・プレス、1995年。Lloyd, Cynthia, Barbara Mensch, 「Implications of Formal Schooling for Girls' Transitions to Adulthood in Developing Countries. (開発途上国における少女期から成人期への移行に正規の学校教育が持つ意味)」、Bledsoe, Caroline H. (編), 「Critical Perspectives on Schooling and Fertility in the Developing World. (開発途上世界における学校教育と出産に関する評論展望)」、ワシントンD.C.、全米アカデミー出版局、1999年より。国連, 「Women's Education and Fertility Behavior: Recent Evidence from the Demographic and Health Surveys. (女性の教育と出産の行動学——人口動態と健康調査による最近の証明)」、ニューヨーク、国連、1995年。

25 Marphatia, Akanksha A., 「Creating an enabling environment for girls' and women's participation in education. (女の子と女性が教育に参加できる環境を実現する)」、タイ、バンコク、2005年11月8日 - 11日開催の国連女性の向上部 (DAW) 専門家グループ会議, 「Enhancing Participation of Women in Development through an Enabling Environment for Achieving Gender Equality and the Advancement of Women, (ジェンダーの平等と女性の地位向上実現を可能にする環境を通じて開発への女性参画を増加させる)」において発表された論文。引用：Klasen, S., 「Does Gender Inequality Reduce Growth and Development? Evidence from Cross-Country Regressions. Policy Research Report on Gender and Development Working Paper 7. (ジェンダー不平等は成長と発展を阻害するのか？ 全国規模の後退が示す証拠。ジェンダーと開発に関する政策研究報告書、調査結果報告書第7号)」、ワシントンD.C.、世界銀行、1999年。

26 Temin, Miriam, Ruth Levine, Nandini Oomman, 「Why it's the right time: Moving on Reproductive Health Goals by Focusing on Adolescent Girls. (なぜ今がその時なのか——思春期の女の子に焦点を当てることで性と生殖の健康における目標を押し進める)」、ワシントンD.C.、ウィメン・デリバー、2010年。引用：Gupta, Neeru, Mary Mahy, 「Adolescent Childbearing in Sub-Saharan Africa: Can increased schooling alone raise ages at first birth? (サハラ以南のアフリカにおける思春期世代の出産——学校教育の増加による初産の高年齢化は可能か?)」、『デモグラフィック・リサーチ』第8巻4号 (2003年)、<http://www.demographic-research.org/Volumes/Vol18/4/8-4.pdf>.



27 Charley Nussey、ロンドン大学教育研究所。

28 Leach, Fiona, 「Gender Violence in Schools in the Developing World. (開発途上世界の学校におけるジェンダーに基づく暴力)」、『ジェンダーと教育』第 18 巻 1 号 (2006 年)。Laurie, Emily, 「プランの『Learn without Fear (体罰・いじめ・性的虐待のない学校推進)』キャンペーン進捗報告」、ウォーキング、プラン・インターナショナル、2010 年。Leach, Fiona, Claudia Mitchell (編)、 「Combating Gender Violence In and Around Schools. (学校内及び学校周辺におけるジェンダーに基づく暴力と闘う)」、ストック・オン・トレント、トレンサム・ブックス、2006 年。Parkes, Jenny, Jo Heslop, 「Stop Violence Against Girls in School: A cross-country analysis of baseline research from Ghana, Kenya and Mozambique. (学校における女の子への暴力を止める——ガーナ、ケニア、モザンビークにおける全国横断的ベースライン調査結果の分析)」、ロンドン、アクションエイド、2011 年。Antonowicz, Laetitia, 「Too Often in Silence: A Report on School-Based Violence in West and Central Africa. (沈黙に沈みすぎて——西・中央アフリカにおける学校内暴力の報告)」、UNICEF、プラン・西アフリカ地域統括事務所、セーブ・ザ・チルドレン西アフリカ及びアクションエイド、2010 年。

29 Hausmann, Richard, Laura D. Tyson, Saadia Zahidi, 「グローバル・ジェンダー・ギャップ報告書 2011 年」、ジュネーヴ、世界経済フォーラム、2011 年。

30 FAWE, 「Yemane plans to go for the highest degree available (イエマネはできるだけ高い学歴を狙うつもりでいる)」、<http://www.fawe.org/resource/voices/yemane/index.php> (最終アクセス日 2012 年 5 月 29 日)。

